

『# 藍を継ぐ海』（伊予原新著）を読んでみた。著者は東京大学大学院理学系研究科で地球惑星科学を専攻し、博士課程修了。『お台場アイランドベイビー』で横溝正史ミステリ大賞を受賞。『月まで三キロ』で新田次郎文学賞を受賞。本書で直木賞を受賞。

科学的な論考を交えながら書かれた五篇の短編集。

山口の見島で、萩焼に絶妙な色味を出すという伝説の土を探す男性元カメラマン。見島は人口六百人ほどの小さな島である。見島の成り立ちは日本列島の誕生と深く関わっている。およそ二千万年前から千五百万年前にかけて、アジア大陸の東縁が割れて隙間に海が広がっていき、日本列島が現在の位置まで移動してきた。見島は、そのとき日本海の海底にできた裂け目から噴き上がってきたマグマが作り出した火山島なのだ。この島では、萩焼に欠くことのできない「見島土」が採れる。一説には、島流しの憂き目にあった江戸期の名工、六代林半六こと林泥平がこの粘土を本土に持ち帰り、以降萩焼で広く用いられるようになったという。ここで女性地質学者と萩焼き職人の男性が出会う。

萩焼

萩市一帯で焼かれる陶器。一部長門市、山口市にも窯元がある。長門市で焼かれる萩焼は、特に深川萩と呼ばれる。古くから「一楽二萩三唐津」と謳われるほど、茶人好みの器。萩焼の特徴は原料に用いられる陶土とそれに混ぜる釉薬の具合によって生じる「貫入」と使い込むことによって生じる「七化け」がある。貫入とは器の表面の釉薬がひび割れたような状態になることで、七化けとはその貫入が原因で、長年使い込むとそこにお茶やお酒が浸透し、器表面の色が適当に変化し、枯れた味わいを見せることである。

長崎の空き家で、膨大な量の謎の岩石やガラス製品を発見した若手公務員。

長崎原爆遺跡

1945年8月9日に長崎に投下された原子爆弾の被害を伝える遺跡。爆心地、被爆校舎である旧城山国民学校校舎、崖下の小川に滑落した浦上天主堂旧鐘楼、爆風により傾いた旧長崎医科大学門柱、爆風で一本柱となった山王神社二の鳥居から構成されている。

都会から逃れ移住した奈良の山奥で、ニホンオオカミに「出会った」女性ウェブデザイナー。

ニホンオオカミ

食肉目イヌ科に属するオオカミの絶滅亜種。本州、四国、九州に生息していた。縄文時代以降の遺骸が出土する。オオカミの亜種の中では小型である。家畜化されたイエイヌに最も遺伝学上近く、共に東アジア発祥で祖先を同じくすると考えられている。1905年、奈良県で捕獲された若いオスが確実な最後の生息情報である。「過去50年間生存の確認がなされない場合、その種は絶滅した」とされる。

年老いた父親のために隕石を拾った場所を偽ろうとする北海道の身重の女性。隕石の落下地点を偽って、代々一家が務めた郵便局名を残そうとする悲しい嘘。天の川銀河の二千億個ともいわれる恒星系の一つで地球が四十六億年前に生まれた。流れ星の正体は彗星の塵や小惑星の破片である。

隕石

日本で隕石が落ちた場所は、岩手県、東京都、千葉県、香川県、愛知県、埼玉県などである。気仙隕石は、1850年に落下した隕石で、日本で最大の隕石である。八王子隕石は、1817年に落下した隕石で、石質隕石で、外側は真黒に焦げており、割れた内側は青色と白色であった。習志野隕石は、2020年に落下した隕石である。国分寺隕石は、1986年に高松市国分寺町と坂出市に落下した隕石雨である。愛知県小牧市の民家に隕石が落下したことがある。越谷隕石は、100年以上前に埼玉県越谷市に落下した隕石。

徳島の海辺の小さな町で、なんとかウミガメの卵を孵化させ、自分ひとりの力で育てようとする、祖父と二人暮らしの中学生の女の子。村の浜でウミガメの産卵を見守ってきた人々は、それらが遥か太平洋をひと巡りして戻ってくる。

ウミガメ

爬虫類カメ目のウミガメ科とオサガメ科の総称で、現在世界で7種類が知られているウミガメは一生のほとんどを海中で過ごし、産卵の時だけ砂浜に上陸する。日本で生まれた子ガメは、太平洋で回遊生活を送った後、日本近海で生活する。親ガメになるのに30年ほどかかる。ウミガメの保全を目的として、日本ウミガメ協議会が設立されている。そして、ウミガメの調査・研究結果を基に、ウミガメの保全や生態系全体を保全できる方法を模索している。

科学の知識を基に、現実の世界の細部を、豊かなものにする物語を作り上げた。列島の各地で営まれてきた行事や営みに科学の光を当てた作品群である。